歌集

小太陽

櫻井芳雄

歌集

小太陽

櫻井芳雄

著者近影

著者略歴

明治42年3月神奈川県生。
昭和13年法政大学高等師範部国語漢文科卒。
藤沢市助役等を歴任。
潮音同人。日本歌人クラブ会員。

一九八九年八月三十日　発行

歌集　小太陽（せうたいやう）

著者　櫻井芳雄（さくらゐよしを）
〒251　藤沢市鵠沼桜が岡三―八―二一

発行者　石川靖雄

印刷者　塚田益男

発行所　石川書房
〒169　東京都新宿区北新宿二丁目二十二番一号
電話03―三六九―二五四一
振替　東京七―四一八九三

定価　三〇〇〇円

本文印刷／錦明印刷株式会社　　製本／山田製本印刷株式会社

序

昭和が平成と改まつた正月某日、藤沢の潮音同人櫻井芳雄氏が歌集を編むので序文をといつて、歌稿を携へて来られた。

拝見すると、大正十三年頃から昭和六十三年までの作を千二百首ばかりに纒めてある。

氏は、昭和十三年改造社発行の『新萬葉集』巻四巻末の作者略歴によると、大変古い歌歴の持主である。神奈川県高座郡小出村（現藤沢市遠藤）に生まれ、少年時代「武相の若草」を通じて、郷里の先輩前田夕暮に師事、のち並木秋人の「常春」同人、「ひこばえ」「短歌祭」創立同人を経て、「短歌祭」廃刊後、昭和十二年四月「あめつち」を創刊主宰とある。

戦争後期は応召もして、その後長いブランクがあり、活発に作歌につとめられるやうになつたのは、ここ七、八年のことのやうであつて、われわれ潮音の仲間になつてからは五年ほどに過ぎない。しかし大変熱心で、東京の大きな歌会はもとより、湘南歌会の有力メンバーであり、最近は藤沢で潮音同人らと共に藤の実歌会を興し、その推進役となって活躍してゐる。

私とほぼ同年輩であり、昭和六十年秋の長江下りから武漢、岳陽、長沙に及ぶ潮音の第四回訪中旅行の時は、十日ばかりご一緒したので、今は旧知の如く親しく願つてゐる。

以上見て来たやうな歌歴の人ゆゑ、優に数冊の歌集を成してゐてよい筈であることを前もつて一言しておく。

大正十四年から始まる戦前の前編「若草」は、

よべよりの雨晴れにつつ藁屋根のしめりすがしく朝明けにけり

風呂の火はとろろに明し火明りのとどく庭辺の鳳仙花のはな

坂のぼり行く黒馬の太腹のてらてら光り夕さりにけり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

肥散り田の泡照りしぶる梅雨気配昼ながら蟇はのどぶとの声

等の作によつて始まる。相模野の田園にあつて、農業に専念してゐた時代のものであるが、よく自然を観察してゐるばかりか、なかなかの技巧家であることに驚く。しかもこれらがまだ十八歳頃の青年の作であることに更に驚きを深くする。その後、家庭の事情もあつて上京、工場に勤めながら夜間大学に通つたやうであるが、昭和五年から八年頃にかけての、

夕霽れの風に揉まれて背戸山の木混みのさくら散り明り来る

山柿のてらてら光る岡の上はとろろとんびの声流れつつ

野阜（のづかさ）の一粟畑に穂刈りするひと金色に没り陽を被ぐ

等の作を見れば、もう一応完成した風体を成してゐるといつてよい。従つてこの頃、歌集を出してをれば、戦前すでに一廉の歌人を以て偶せられてゐたであらうにと惜まれる。

近六、七年の作はぐつと平静に下つて、より大胆に地声で歌つてゐるやうに見える。

華やぎし対話に妻がいま見せしそぶりはたしか若き日のもの
三十分歩みて今朝を海に来つ来たるしるしに双手をひたす

かうした境地は、氏が長い会社や役所づとめを経て人間が練れ、今や停年後の余裕をたのしんでをられるところから来るものであらう。

しかし本来的氏の烈しさ鋭さは、

闇ぐらにつめこまれたる弾頭の核にもこころあるやも知れず
をみなうた男がうたひをとこうた女がうたふ戦後のうつり
こども等のゆめを湛へて公園の遊具はどれも定型詩にて
遅れじと体当りして割込みし電車はわれがいまは拒めり

と、かなり緩和しつつも、鋭い知的批判を隠すところがない。

後編「命生きて」の中で、量的にも注目をひくのは、六十年度の訪中の作である。

上海の早き目覚めよ港より霧笛のあいさつしきりにとどく
重慶の朝霧深し江上に漕ぎ惑ひしや杜甫の小舟は

江に迫り峙つ山の岸辺にも畑あり山羊をり一塵のあり

真昼間の光を浴びて神女峰巫峡の虹の上に艶めく

B・C百六十年の男のミイラ引出されあはれ観光に稼がされをり

等はその一斑であるが、この地は氏が曽て兵士として出動した地であつてみれば、これはむしろ当然のことであつたらう。

古墳より出でくる蟻のくろき列わが想像を逞しくせりの想像と暗示。

抱卵の柳葉魚つまめばビア樽のごとき女将が麦酒注ぎ来ぬのユーモア、

小太陽の厚きかがやき中国の一個孩子に翳りのなきやのヒューマニティックな同情もまたこの作者に備はつたものであろう。

氏は潮音に所属するばかりか、横浜勤務時代の同僚杉本三木雄氏との友誼で「創生」（筏井嘉一創刊）にも三年間ほど出詠し、そこからも滋養を吸収するにやぶさかでないので、氏が近代短歌を綜合するところに目標をおいてゐること

が想像される。

今後一層のご活躍を期待し、そのためにも更なるご自愛を祈つて筆を擱く。

平成元年一月

鎌倉市扇谷、杏々山荘にて

太田青丘

目次

序　太田青丘

前編　大正十三年—昭和二十年

若草

山里　一五

雨はれ　一〇

穂孕み　一四

月夜稲妻　一八

草月夜　二〇

光のゆらぎ　二六

夜ごころ　二八

雨間虹　三〇
工場のうた　三三
夜　学　三六
土の処女　三八
その一　麦刈り日和　三八
その二　しひな麦　四一
その三　盆月夜　四四
その四　夕草刈　四六
その五　満月魄　四八
その六　小岫の秋　五〇
延山居　五二
マルメロのうた　五四
師よ　友よ　五七
桝形山　五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

合歓の花　六三
土用太郎　六四
月映え　六六
潮の匂ひ　六八
わが相模　七〇
秋の足柄　七一
なでしこの花　七三
床下の蚯蚓　七四
鬻ぐもの　七五
荏原中延　七八
寮友病む　八〇
秩父路　八一
帰　省　八五
環状八号線　八七

夜更け月　八九
日光山　九〇
麗　日　一〇一
寸暇帰郷　一〇三
洗足池畔　一〇四
祝婚歌　一〇六
千人針　一〇七
夢と戦争　一〇九
なげくとき　一一一
公　私　一一三
日なたみち　一一三
柏尾川　一一四
青麦の風　一一六
野ごころ　一一八

銃後冬夜　一二〇
後編　昭和五十四年―昭和六十三年
命生きて
世相断片　一二五
駅に拾ふ　一二六
追憶　一二九
門火　一三〇
挽歌　一三二
干支改まる　一三三
庭瘤　一三四
春日渇くを　一三六
杳々山荘　一三七
有情聞こゆ　一三八
老いてなほ　一四一

北信旅情　一四三
華やぎ　一四五
戦争の傷口　一四六
闇ぐらの核　一四八
石のこころ　一五〇
核のはざま　一五三
短日賦　一五四
新　春　一五六
紅　梅　一五八
厄除け行事　一五九
男みち　一六一
釘打ち置かむ　一六三
沈丁花　一六四
閃き止まず　一六五

静　居　一六八
傷身賦　一六九
夏日深閑　一七二
耳鳴り　一七四
江の島　一七六
窓の夏　一七七
御巣鷹山　一七八
長江余韻　一八〇
上　海　一八〇
重　慶　一八二
忠　県　一八五
萬　県　一八六
奉　節　一八八
三峡下り　一八九

葛州ダム　一九二
沙　市　一九三
荊州城趾　一九四
敗戦回顧(一)　一九七
武　漢　二〇〇
岳陽・君山　二〇一
長沙・愛晩亭　二〇三
長江俯瞰　二〇五
敗戦回顧(二)　二〇六
上海光景　二〇八
加害者　二一一
彗星近づく　二一三
冬　庭　二一三
吾子よ　二一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.